

# 水稲

すいとう



## ○良質米の生産に向けて

稲は登熟が良いほど(粒厚が厚いほど)乳白粒割合や玄米タンパク質含有率が低下し、品質・食味が向上します。

したがって、稲体が好適な栄養状態を保つとともに根張りを良くし、登熟後期まで根の活力を維持させ、登熟の向上を図ることが重要です。

## ☆「地力アップ」を活用した土づくり

土壌マップを参照して、黒ボク土は、地力アップPSK60〜100kg、沖積土ではFe120〜140kgを10a当たり施用すると効果的です(表1)。

また、土壌分析をした結果、養分過剰と判断された土壌については、表2を参考に、ひとふりくんシリーズの低成分肥料をおすすめいたします。

## ☆作土深の確保

作土は養分の貯蔵庫です。最近はや作土が浅耕化しており、作土が浅いと根張りが悪く、初期生育は良いが、秋落ちの生育となり、倒伏しやすい稲になってしまいます。また、登熟不良や異常気象災害に弱く、品質・食味

低下の原因となります。作土は、15〜20cmを目標に深耕しましょう。そうすれば、根張りが良くなり、倒伏に強くなります。地力チッソが多くなることで、チッソ肥料の節減にもつながります。

【表1】水田土づくり肥料の施用例

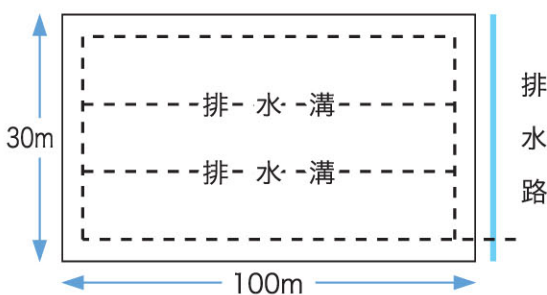
推奨ほ場	資材名	10a当たり 施用量	供給成分(kg)				
			リン酸	カリ	苦土	ケイ酸	鉄分
沖積土	地力アップFe	120~140kg	8.4~9.8	—	4.8~5.6	21.6~25.2	12.0~14.0
黒ボク土	地力アップPSK	60~100kg	12~20	4.8~8	2.4~4	7.2~12	—

【表2】水田土づくり肥料の施用例

品名	N	P	K	Mg	Si	10a当たり施用量(kg)
ひとふりくんプレミア100号	10	10	10	2	11	48~50
ひとふりくんプレミア200号	10	10	10	2	11	40
ひとふりくん100号	12	14	12	2	—	30~40
ひとふりくん200号	10	12	12	3	—	30~40

※プレミア100号は初期莖数確保がやや困難な地域用  
プレミア200号は初期莖数確保がやや容易な地域用

【図1】排水対策の例

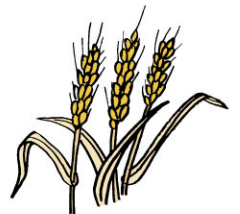


24年産麦は、播種時期に大雨に見舞われることもなく、順調に発芽したほ場が多く見られます。播種後の湿害を避けられても、麦は収穫まで生育段階に依りて、様々な形で湿害を受ける作物です。特に、近年は季節はずれの大雨が降ることが多く、滞水すると麦はたちまち湿害を受けます。不意の雨に備えて、ほ場周囲やほ場の中に排水溝を設け、排水路につなぎましょう(図1)。

## ☆排水対策の実施

# 麦

むぎ



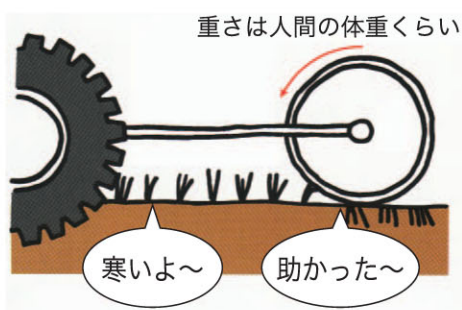
## ☆麦踏み

麦踏みは、地上部の過剰生育を抑制しながら、分けつを旺盛にし、根張りを深くするとともに、茎葉汁液濃度を高め、耐寒性を増大させる効果があります。

麦踏みは、葉が3枚見えることから実施できます。昨年末までに1回は麦踏みを行っていることと思いますが、まだの人は早急に実施しましょう。踏み重さは、人の体重くらいが適当です。麦踏みローラーに土がついてこないような乾いた状態のときに踏むようにしましょう。

なお、降雨(雪)後で、ほ場が湿っているときや、凍結層があるときは行わないようにします。麦踏みは、茎立ち期(例年3月上旬)までに2回以上は行ってください(図2)。

【図2】麦踏みは凍上害の防止も





連作とは、同じ場所に同じ野菜もしくは同じ科に属する近縁の野菜などを続けて作付けすることをいいます。この連作という用語は、他方異なる野菜や作物を組み合わせて作付けする輪作に対応して用いられるものです。

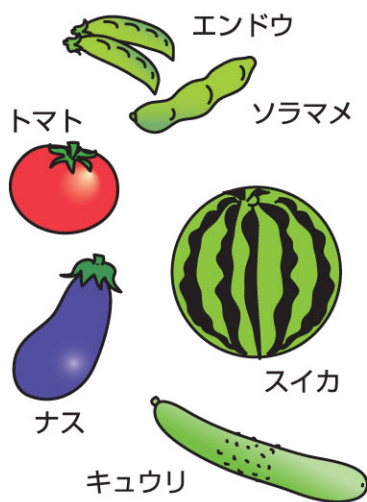
実際に同じナス科のトマトとナスを、同じ畑に続けて栽培すると、通常の肥培管理をしても生育、収量、品質が劣ったり、病害虫の発生が多くなったりします。これが連作障害です。長年安定した野菜栽培を続けるには、この連作障害を出さないようにすることが大変重要なわけです。連作障害を起こす原因としては、

連作障害の原因となるもの

※野菜試全国調査による

- 土壤病原菌
- 空気伝染性病害
- センチュウ、土壤害虫
- 土壤の理化学性悪化
- 植物由来の有害物質 など

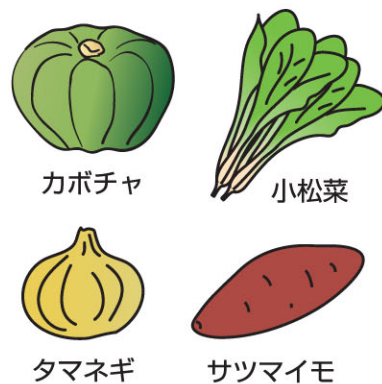
連作障害の出やすいもの



- ③ 植物の根からの毒素による害 (いわゆるいや地現象)
  - ④ その他不明の原因
- などが挙げられます。この中で最も原因として多いのは土壤病害で、ナス科野菜、ウリ類、イチゴ、ダイコンなどのフザリウム病、萎凋へいちょう病、つる割れ病、萎黄病などやアブラナ科野菜のネコブ病、ナス科野菜の青枯れ病、ジャガイモのそうか病があり、各種野菜のセンチュウなど害虫の被害も大きいです。土壤の理化学性の悪化は、耕盤の形成や酸性またはアルカリ化、肥料過多による土壤溶液濃度の高まりや、養分バランスの乱れなどによる栄養障害の発生によるものです。

連作の害が特に著しいのはエンドウ、ソラマメ、サトイモなどです。

連作障害の出にくいもの



また、ナス科、ウリ科、アブラナ科野菜も共通の病害虫を持つているので、障害が出やすいです。

連作障害対策として第一に守るべきことは、発生しやすい野菜は一定期間他の野菜を組み入れ、輪作を行うことです。輪作で空ける年限の目安は、ホウレンソウ、コカブ、キャベツなどは1年、ハクサイ、ハナヤサイ、レタス、インゲンなどは2年、トマト、ナス、ソラマメ、サトイモなどは3〜4年、エンドウ、スイカなどは4〜5年です。ただし、果菜類で耐病性の台木に接ぎ木したものは連作することができません。

適正な土づくりや施肥を行うことも大変重要です。その他コンパニオンプランツを取り入れたり、積極的に土壤消毒をする方法もありま

すので、よく検討して対策を講じてください。

お天気カレンダー  
寒さは底から？ 風カラ？

一般財団法人日本気象協会 ● 檜山靖洋



一年の中で最も寒い季節に入ります。日本全国、寒さにもいろいろな種類があります。私は以前、気温が氷点下5度の北海道から10度の東京に帰ってきたとき、北海道より東京の方が寒く感じたことがありました。気温の数字だけでは比べられない、東京の独特の乾いた風の寒さがあります。

よく晴れて風の弱い夜間は、深々と足元から冷え込みます。これが「底冷え」です。一方、冬の気圧配置が強まり、北風がビュービュー吹くときは、風が体温を奪い、「風冷え」になります。特に冬の太平洋側は、空気が乾いてから風となり、いつそう寒く感じるものです。

底冷えのときは、足元やインナーに暖かいものを身に着けるとよく、風冷えのときは、風を通さないウインドブレーカーなどを一番上に着るとよさそうです。寒さの種類に合わせて対策で、上手に冬を乗り切りましょう。